
愚意

逆叫

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚意

【Nコード】

N9893E

【作者名】

逆叫

【あらすじ】

記憶に刻まれて離れない。そんな過去の記憶に苛まれて続けてきた。人とはなんなのだろうか。

昼下がりの公園は、おぼろに人が居るだけで平和という言葉がぴったりに見える。砂場で無邪気に遊ぶ子供。追いかけてこをする子供。滑り台の取り合いをしている子供。そして、それを幸せそうに眺めている母親たち。いつか自分もそうだったのかもしれない。

老人はブランコに腰を掛けていた。二つしかないブランコの老人が乗っていないほうは、僅かな風でゆらゆらとゆれている。そのたびに金属音が軋みをあげる。

老人は、無邪気な彼らを見ていて、自分の人生を後悔し始めていた。この後悔は瞬く間に、向ける先の無い憎しみに変わる。そして、その憎しみは、喪失感と変わり死への欲求を強めていく。老人は屍になるばかりをまつ、「役立たず」になってしまっていた。

自分は成功を収めた。だからこうして今ここに座っている。成功。今になって考えてみれば、どうしようもないことだった。そればかりか、人生の歯車を大きく狂わせ、地の底へと落ちる結果になってしまった。だが、成功は成功だった。その後のことを見ても見なくても。

そんな老人に、一人の子供が近づいてきた。まだ五歳かそこらになったばかりの子供だ。母親らしき女性の姿が見当たらない。

「おじさん。そこどいて。」

彼は、開口一番にそう言った。老人は少し驚いたように目を見開いたが、やがて優しく何か純粋なものを扱うかのように言った。

「坊やは人が死ぬのをどう思うかい？」

子供は怪訝そうに顔を背けたが、やがて老人に向き直った。

「……悲しいことだと思う。」

老人は微笑んだ。なんと『典型的』な子供だろう。老人は、この「典型」に憧れていたのかも知れない。

老人は、皺に埋め尽くされた人指し指を一本だけ立てた。そして、

下げる。

「じゃあ、人が人を殺すのはどう思うかい？」

子供は、意味がわからなかったのか、きょとした顔になった。老人は構わず続けた。

「人が人を死に陥れる。ヒーローが悪者を倒すように、人が、その人が悪い、いたら困ると思ってその人を倒してしまうのはどう思うかい？」

子供は言った。

「どんな理由があっても駄目だと思う。」

老人は思わず笑ってしまった。何故だろう。この子供はまだ幼いの。どうしてこう自分の心を直接つくような発言をするのだろうか。

「……どうしてそう思うんだい？」

笑い出した老人をおびえるような顔で見ていた子供は、再び口を開く。

「……後悔するから。」

子供は、どこか空ろな表情をしてそう言った。周囲の子供達の騒ぎ声が別世界に飛んでいってしまったかのように、周囲が静かになったように感じた。

「……後悔？どうして。その人が死んでほしいと思ったから殺したのだろう？どうして後悔するのかな？」

「……分らない。でも。そう思う。」

老人は、自信なさげにそう言った子供を見て、微笑んだ。

「そうか……悪かったね。」

そう言って老人はブランコから立ち上がった。大分体にガタがきているようだ。もう長くないかもしれない。

「おじさんは。」

ブランコに飛び乗った子供が、いつて来た。何故か、老人が座っていない方のブランコに座っていた。

「人を殺しちゃったの？」

老人は、爽やかな日差しがてりつける空を見た。そして、そのまま言った。

「成功しても……虚しか作り出さない……愚意だった……。」
子供はその意味が分からなかったのだろう。首を捻ってから、ブランコを漕ぎ始めた。

老人は、ブランコで遊ぶ子供を振り返った。あの子は……自分が死のうと思っていることが分かっていたのかもしれない。ポケットの中で睡眠薬を握り締めていた手が震えていた。

誰も座っていないブランコが風になびいて、儚げに揺れていた。人の弱さを嘲笑うかのように。

(後書き)

なんとなく、思いついたネタです。意図がようわからんんですが、
まあ……「ご愛嬌で」；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9893e/>

愚意

2010年10月20日08時07分発行